推しゲン Oshi-Gen

地域医療の拠点をリニューアル 全員の意識を統一して臨むプロジェクト

60年以上の歴史がある小田原市の市立病院敷地内に、新たな病院が建設されている。病院工事ならではの大変さもありながら、事業にかかわる多くの関係者との連携を密にし、地域の期待に応えようとしている。そのコミュニケーション強化の秘訣とは。

小田原市新病院建設工事

株式会社竹中工務店

【今月の推し】

1 高度かつ専門的な要望を叶える対応力

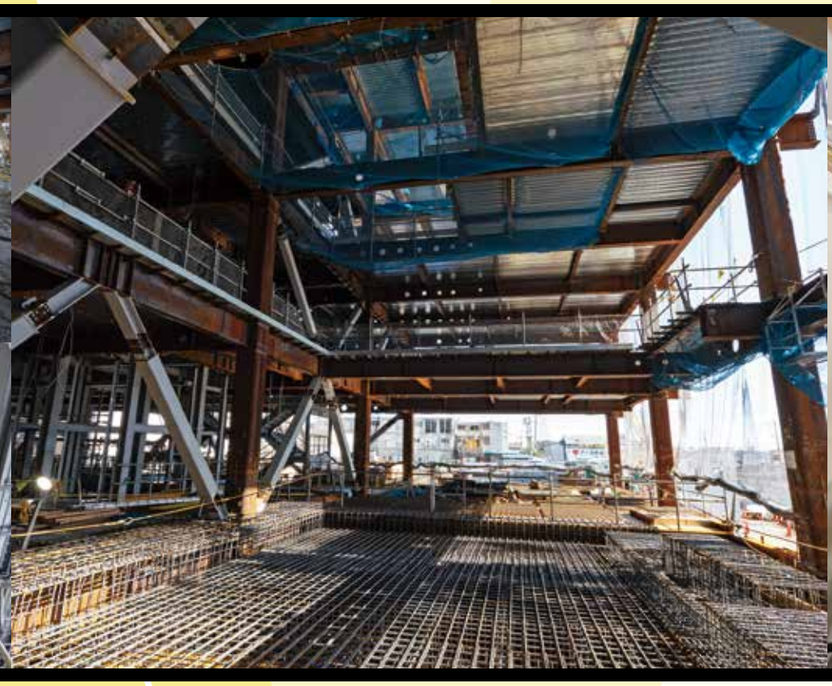
2 “いい病院づくり”を目指す全関係者の一体感

文：沖野亮　撮影：特記以外は中原一隆

県西部広域を支える総合病院

丹沢や箱根の山々に囲まれた足柄平野の一角に、今回の取材先、小田原市新病院建設工事の現場はある。同病院は、神奈川県西部の二次保健医療圏の基幹病院に位置付けられており、小田原駅から路線バスで一本というアクセスのよさもあって、地域医療の重要拠点となっている。開設は一九五八年と古く、一九八四年に大規模な改築工事を行っており、今回は約四〇年ぶりの建替え工事となる。

自身も過去に病院建築の施工を二件手掛けているという㈱竹中工務店・横浜支店の小池達夫作業所長に、この工事にいたった経緯をお話しいただいた。「前回の工事から四〇年間ほぼ手つかずということで、老朽化がだいぶ進行しています。市では一〇年ほど前から建替え計画が検討されて、移転する案もあったようですが、やはりこの地に根付いているということで、同じ敷地内に新病院を建てることになりました」。



上/フィルムを貼って養生中の床コンクリート
下/外壁に柔らかい印象を与えるコーナー部のSFRC版

地下1階の一部・リニアック室はSRC造で、遮蔽用の鉄板クレーンで建て込むまで、上階の床を施工できない

内装モックアップを発注者に確認いただいている様子（提供：㈱竹中工務店）

取材時点（2024年11月）での現場の航空写真。建設中の新病院と既存病院の離隔の少なさがわかる（写真提供：㈱竹中工務店）

もともと駐車場があった区画に建築面積約六、六〇〇平方㍍、延床面積約四万二、〇〇〇平方㍍、鉄骨造九階建て、全四〇六床の新病院を建てるのが今回工事で、新病院完成後は既存病院の機能を新病院に移したうえで既存病院は解体し、そこは新しい駐車場になる予定だ。

取材時点では、CFT（コンクリート充填鋼管）構造の鉄骨躯体の大部分が立ち上がり、新病院の規模が目に見えてわかる状況。同じ敷地内ということで、既存病院のすぐ近くで施工している点が気になった。近接工事なので、周辺には細心の注意を払っていると小池所長は語る。「まだ躯体工事中で外壁がなく、現場内の作業音が外に漏れてしまう。それで、朝八時から夕方六時という作業時間を設けてその時間以外は一切作業しない、車両のドアの開閉音にも気をつけるようにしています」。

この他にも、敷地全体が仮囲いで囲まれていて既存病院の入口がわかりづらくなっているため、病院利用者が迷わないように、バス停からの歩道上に黄色の点字ブロックを敷設するなど、配慮と工夫が見える。

細かいオーダーに対応しながらの施工

人の命を預かる施設である以上、院内各所の仕様は医療従事者にとって最大限使い勝手のいいものでなくてはならない。この現場でも、病室の詳細を決める際に内装モックアップを製作し、医師や看護師などの事前チェックを受けたという。「『メディカルコンソール』といって、病室のベッドのすぐそばに酸素や電源、ナースコールといった設備ユニットがあるのですが、その配列を実際に見ていただきました。縦向きなのか横向きなのか、ベッドのどちら側に付けるか。出来上がってから『これじゃ使いづらい』なんてことになったら、四〇六床全室やり直しになってしまいますから、早い段階で確認していただきました。それ以外にもコンセントや照明スイッチの位置など、そういった細かい要望に応えていくことが、通常の住宅などと異なる点ですね」。

現場内を案内してもらうと、鉄骨造にもかかわらず、高密度で鉄筋が組まれているエリアがある。そこは放射線治療を行うリニアック室にあたり、放射線を遮蔽するために分厚いコンクリートの壁で囲む必要があるため、ここだけは配筋作業が行われている。SRCの躯体が出来上がった後にクレーンで分厚い鉄板を建て込むなど、シビアな工程となる。

また、床のコンクリート品質についても一般の建物とは求められるレベルが違うと、小池所長は話す。「病院は床が命なんです。ちょっとした傾きや凹凸が重大な事故の原因につながりかねないので、打設後の養生に五日間かけ、打ち継ぎ部分の処理にも気を遣っています」。

施工上難しい要素は、病院としての機能だけにとどまらない。今回の工事では、竹中工務店東京一級建築士事務所と、病院建築の実績が豊富な内藤建築事務所が設計JVを組み、デザインビルドで施工している。そのデザインによる

外観は、曲線が目立つ柔らかい印象だが、外壁には特殊な施工が求められるという。「設計コンセプトは『リボン』。まさにリボンで包み込むようなイメージなのですが、この外壁のコーナーのRになってる部分にはSFRC版を使っています」と、建築担当の加藤真輝主任は、外壁施工について説明する。

SFRC版は、鋼繊維を混入して補強したPC外壁で、通常のALC（軽量気泡コンクリート）のものよりも部材を薄くでき、曲げ強度に優れるため、コーナー部などによく用いられる。更に、加藤主任はその施工の特殊性についてこう続ける。「躯体の鉄骨に外装を取り付けるための下地がついているので、発注時点でその精度が確保できていなくてはなりません。他にも建て入れが難しいとか、鉄骨表面がメッキ加工されているので溶接できずボルト締めしかできないとか、かなり珍しい工法になったので、設計者と協力会社も交えて何度も打ち合わせをして、どのやり方が合理的で手戻りもないのか、確認しながら進めました」。

新病院完成イメージ。「リボン」のモチーフはまちへとつながるデザインを目指しており、曲線を帯びた白い見た目からはやさしく親しみのある雰囲気が感じられる（提供：㈱竹中工務店・内藤建築事務所設計JV）

関係者が心を一つにし理想の病院をつくり上げる

このように、工程上の制約となりそうな要因が少なくないにもかかわらず、この現場では週休二日、四週八閉所を達成できており、そこに今回の「推し」があると小池所長は語る。「文字どおり、関係者全員が一体となっている、ということです。小田原市、病院、設計者、協力会社、もちろん我々施工者も、全員が『いい病院をつくろう』という一つの方向を向いて動いている。『自分の領域さえできていればいい』というのではなく、その前後の工程も考えて配慮したり譲ったり、協力し合うことで、厳しいスケジュールや諸々の確認を効率化できています。特に、病院の方で我々が提供した写真を病院のHPに掲載して進捗状況を自ら発信するなど、その期待の高さは励みになっています」。

一方で、BIMモデルを活用したビューワー「トリンブルコネクト」の効果も強調する。「このアプリは扱いやすく、iPadで簡単に見ることができます。職員は現場で見たい時に自分の端末でこれを開いて、職人さんへの施工手順の確認に使っています」。病院関係者への説明にも活用でき、これ自体が、一つのコミュニケーションツールとして機能しているそうだ。

最後に、小池所長に二〇二六年二月の竣工に向けての抱負をお聞きした。「ここの『推し』である一体感を象徴しているのが、現場オリジナルのピンクのヘルメットです。色は小田原市の花であるウメのイメージで、職員も協力会社の面々も、みな同じヘルメットをかぶって、気持ちを一つにしています。上棟後は、病院で大きな比重を占める設備工事が本格化するので、更に気を引き締めて、妥協することなくやり遂げたいですね」。

地域と一体となる取組みとして、近隣の小学校3校の児童たちに「小田原」「元気になる」をテーマに描いてもらった絵を現場の仮囲いに掲示している

現場のヘルメット

3Dモデルには、ボルト1本に至るまですべての資材のデータが反映されているため、全数確認なども省力化できる（下の画像提供：㈱竹中工務店）

協力会社との打ち合わせにて、トリンブルコネクトで施工情報を職長たちと共有する加藤主任

［ 工事概要 ］

発 注 者	小田原市病院事業管理者
工事場所	神奈川県小田原市久野46番地
工　　期	2023年12月28日～2026年2月24日
工事内容	敷地面積：23,021.60㎡ 建築面積：6,611.99㎡ 延べ面積：42,224.87㎡ 階数：B0,F9,PI 構造：S造（リニアック部SRC造） 免震構造（基礎免震） 建物用途：総合病院（406床）

ゲンバのもうひと推し☆

縁を感じる「子持ち勾玉」出土

基礎工事に先立って、駐車場だったところで文化財発掘調査をしていたら、勾玉が出土したんです。ここは小田原なので、大昔の集落の跡が結構見つかるのですが、ここもどうやらそういう場所だったみたいで。この勾玉、背中の部分に小さい突起がついているので「子持ち勾玉」と呼ばれていて、非常に珍しいんだとか。西暦500年くらいの頃に、ここで祭事か何かが行われていた証拠だということで、我々もここで地鎮祭をやりましたから、縁を感じますね。

（提供：㈱竹中工務店）

株式会社竹中工務店
横浜支店
作業所長
小池 達夫 *Tatsuo Koike*